ヒューム主義的スーパーヴィーニエンスの問題は解消されるべきか？

中 村 隆 文*

Should a Problem of “Humean Supervenience” Be Settled?

Takafumi NAKAMURA*

Abstract

There are many problems about causality and identity in Humeanism. Especially, a problem that “Humean Supervenience” allowing many possibilities of various external laws encounters is concerned with the difficulty whether such laws can be coherent with the intrinsic properties of causation. This problem is related to another one whether “Humean Supervenience” is compatible with objectivism in accordance with Hume’s original intention.

Struggling with a disharmony between Hume’s pragmatic epistemology and his realistic ontology, many philosophers have tried to dissolve such a complicated problem. But I think their efforts wouldn’t be successful and the disharmony doesn’t need to be settled, because the prospective collapses of their efforts wouldn’t reduce the meaning of Humeanism.

In this paper, I conclude that the seeming incoherence should be retained, because it suggests a moderate scientific attitude to be placed between dogmatism and skepticism. I demonstrate it by emphasizing the significance of some parts included in Hume’s *Treatise*.

はじめに

本論考の目的は、因果性、同一性をめぐる「ヒューム主義的スーパーヴィーニエンス」という概念を分析し、それが抱える問題を論じたうえで、「ヒューム主義 (Humeanism)」と呼ばれる哲学的立場の意義を改めて見直すことにある。

結果的には、現代の英米哲学における「ヒューム主義」とはミスマッチのようにも見える「内在主義的実在論」を重視し、その立場を少なからずヒューム自身に帰属させているように見えるかもしれないし、多少はそのことを認めざるを得ない。しかし、私はなににも、従来の「ヒューム主義」が築き上げてきたものを捨ててつもりはない。というのも、それらはやはりヒューム思想の正当な系譜であろうし、それらを捨ててしまえば、ヒューム思想本来のラディカルな魅力が損なわ

れてしまうからである。そこで本論考では、ヒューム主義者たちが築き上げてきたものをなるべく捨てることなく、ヒューム思想に内包されるジレンマにスポットをあてながら、「ヒューム主義」の根底にある科学的態度の重要性について再確認したい。

1. ヒューム主義的スーパーヴィーニエンス (ヒューム主義的付随性) について

まず、「ヒューム主義」が因果性や同一性などについてどのような主張をいう立場であるのかを考えてみよう。従来、ヒュームの因果性分析や同一性分析は、プラトン-デカルト的な二元論もしくは理性主義への批判として提出されたものであり、20世紀初頭まではその懐疑主義的論調のみが強調されがちであった。しかし、20世紀前半から現在に至るまでの現代思想の発展に伴い、ヒュームへの再注目を経て構築された「ヒューム主義」では、ヒュームの議論のネガティブさには

* 千葉大学文学部非常勤講師
(Chiba University)

なく、むしろそれがポジティブに何を主張しうのかという問題へと議論の焦点を移しているようにも思われる。

ヒューム主義者に分類される哲学者はあまりにも多いため、紙幅の都合上、ここで「ヒューム主義」として概略的に説明するものは、著名なヒューム主義者であるD・ルイスの思想と、その重要概念である「ヒューム主義的スーパーヴィーニエンス (Humean Supervenience: 以下 HS)」に限定しておきたい。もちろん、ルイス以外にも興味深い見解を示す「ヒューム主義者」は多々存在するのではあるが、少なくとも、因果性や同一性などの法則的性質に関わるポジティブかつ興味深い議論を提出した「ヒューム主義者」からルイスを外さなければならぬ強い理由が私には見当たらない。そこで以下、「ヒューム主義」としてのルイスの議論の概要を挙げてみたい。

私はさきほど、現代思想においてはヒューム思想に沿ったポジティブな問題提起がなされてきたと述べたが、これはなにも「ヒュームが批判していたプラトン・デカルト的な二元論および実在論的な存在論的主張について、現代のヒューム主義がそれを安易に認めている」という事態を意味するものではない。もちろん、20世紀以前の懐疑論的ヒューム解釈では到底認めはしないであろうそうした存在論的主張の一部は限定的にとはいえ認められているし、ルイスの思想もそうしたものの一つといえる。しかしその認め方が「限定的」であるのは、「ヒューム主義」と呼ばれるに相応しき所以がそこでの議論に含まれていることを理由としているのである。

まず HS の概念について説明してゆこう。HS とは、可能世界論や反事実条件分析を含んだルイスの哲学的主張において不可欠なものであり、それはヒュームの個別化原理 (principium individuationis) を諸対象、ひいては世界様相そのものへと存在論的に適用したものである。端的に言えば、世界そのものを諸粒子から成るモザイクと見立てた上で、そこに因果性や同一性、偶然性などの各種法則性が付随 (supervene) しているとする原理である¹。そして、そのような HS を原理と

した世界様相に関する定義とは「もし二つの世界がすべての個別的事実の内容において完全に一致しているならば、それらはすべての他の仕方——様態的性質、諸法則、因果、関係、偶然性……——においてもまた完全に一致している」²というものになる。つまりは、この世界を含め、あらゆる世界の法則性は、それが付随するところのローカルな自然的性質の配置 (distribution) に依拠しているので、世界間の自然的性質の配置が同じである限りは、そこにおいて見出される因果性や同一性などは同じとみなすことが合理的であるということである³。

さらにルイスは HS を物理主義とセットで使用し、この世界においては HS によって支えられた世界的な物理法則が機能し、ローカルで起きている現象もそうしたグローバルな物理主義的法則性言明から説明可能となると考える。しかし単にグローバルな法則性を二元論的に安易に仮定したりはしない。というのも、HS は局所的に実在しているローカルな自然的性質の配置が不可欠な原理であるため、それはローカルエリアにおける内在的な性質を前提としているし、その配置の仕方から合理的な信念を形成できる認識主体の意義をルイスは認めているからである。そして、それらの信念とマッチするような物理主義によって局所的環境における現象をグローバルな観点から説明できるとすれば、HS と物理主義とのセットを用いたルイスの思想は、局所的環境における主観的知覚経験を重視するヒュームの議論が、物理主義のような客観主義と調和しうる可能性を示しているといえるのである⁴。

¹ 「ヒューム主義的スーパーヴィーニエンスは、必然的關係についての偉大な否定者に敬意を表して名付けられたものである。その教義は、世界に存在する全てものは、個別的事実のローカルな事物の広大なモザイクである。」 David Lewis, *Philosophical Papers* vol.II, New York, Oxford, Oxford U.P.(1986), intro p.ix.

² David Lewis, "A Subjectivist's Guide to Objective Chance." in *Philosophical Papers* vol.II, p.111 を参照されたい。二つの世界における自然的性質に関わる事実が同じでありさえすれば、一方には物理法則を認めながら他方に魔法法則などを認めることなどはありえない、という姿勢がここには含まれおり、これは「付随性についての強い主張」といえるであろう。

³ 二つの世界がまったく同じ自然的性質の配置をなしているのに、異なる二つの実在的法則をそれぞれの世界に別個に帰属させる正当な理由はなく、これを無理に行うとすれば、ヒュームが批判した「教条主義的な理性主義」をどこかで持ち出すしかないであろう。この意味で、HS は実在論的な世界様相論に使用されているとはいえ、「ヒューム主義的」概念といえるであろう。

⁴ David Lewis, "A Subjectivist's Guide to Objective Chance." in *Philosophical Papers* vol.II においても「信頼 (credence)」と「可能性 (chance)」との関係を肯定的に関連付けるような試みが積極的になされている。

2. HS を用いたヒューム主義が抱える問題点

今見てきたように、ルイスの試みは「ヒューム主義」の思想として興味深く魅力的なものであるが、しかし HS を採用し世界法則的な物理主義を推奨する哲学的主張には大きな問題が含まれている。以下、そのことを見てゆこう。

紙幅の都合上、ここでそうした問題点への各種批判を詳細に紹介するわけにもいかないが、一例として R・ワッセルマンの批判を簡単に挙げておく。ワッセルマンは、人格同一性問題における「持続」は「因果性」を必要としており、そして、人格同一性の因果的事実というものは局所的事実として内在的性質を含んでいるはずなのであるが、それを重要視しない HS の主張は受け入れがたいものである、と主張する⁵。ワッセルマンは、人格同一性が自然的性質の配列 $\langle x, y \rangle$ とそのコピーセット $\langle w, z \rangle$ によって法則的に論じられたとしても、「 x は y と同一人物である」事態を成立させている同一性自体は、 x と y との間との内在的関係 (intrinsic relation) そのものに依拠している、ということを強調する。HS は、ローカルな自然的性質の諸配置に支えられたグローバルな法則性を成立させている原理ではあるのだが、結局そうしたグローバルな法則性に頼るということは「 $\langle x, y \rangle$ を遥かに越えた、宇宙の片隅での事態をも含めた包括的な仕方では $\langle x, y \rangle$ の人格同一性が法則的に決定されている」のであり、それは直観に反しているとワッセルマンは語る⁶。つまり、人格同一性などを「持続」させるような因果的事実は、局所的環境 $\langle x, y \rangle$ において内在的に保証されているはずなの

に、HS はそれを拡張し、ひどく外在的な枠組みで人格同一性を捉えようとする点で受け入れ難いというのがワッセルマンの批判のポイントといえる⁷。

さて、ここで考慮すべきは、そもそもの HS の意義である。ルイスは物理主義とともに HS を採用しているが、物理主義として HS を採用しているわけではない。というのも、そもそも HS と物理主義とは同義ではなく、HS を採用する物理主義が偽であっても、HS そのものには真偽性とは別次元の有用性が備わっている⁸。HS は確かに物理主義と結合しやすいものではあるし、現実的にセットで用いられているが、それ自体は「ヒューム主義」としては重要なことではない。HS が重要であるのは、異なる二つの現象・対象の観察結果が同じである場合には、同種の性質が付随しているときとみなすような「科学的態度」を尊重している点であり、世界を物理主義的決定論のもとでのみ語ることを目指すものではない。実際、当のヒューム本人でさえも、「魂」が物質的なものか非物質的なものかについての論争に加わるつもりはなく、知覚間の関係によって形作られる「魂」という概念をどのように取り扱うか、という問題にコミットしているにすぎない、と宣言している⁹。

さらに HS の提唱者であるルイスにあっては、同じ自然的性質の配置を示す世界観察が二つあったとしても、そこには異なる法則性言明が適用されうることすら認めている。「諸性質の配置に異なることなくして、いかなる仕方においても、2つの可能世界が全く異なるものであることはない、ということを私は実際に言っているのではない。というのも、ヒューム主義的スーパーヴィーニエンスは、せいぜい偶然的な真理である

⁵ Ryan Wasserman, "Humean Supervenience and Personal Identity," in *The Philosophical Quarterly* Vol. 55 No. 221, Blackwell (2005) pp.582-93.

⁶ ワッセルマンの批判には次のものがある。もしヒューム主義者が、ノージックの「最近接連続者 (a closest continuer)」理論を「恣意的」として拒絶したとしても、本質的には同様の奇妙さが HS には残るというものである。人格同一性が「そこではないどこかで起きること (最近接連続者理論)」によって影響されるのは奇妙であり、ヒューム主義者はこれを否定するかもしれないが、「そこではないどこかで起きていること」をも含めて外在的に決定されているとする点では、ヒューム主義者の見解はやはり奇妙なものであり、それは受け入れられるものではないとワッセルマンは主張する (ibid., 591)。ノージックの「最近接連続者」については、Robert Nozick, *Philosophical Explanations*, The Belknap Press of Harvard University Press Cambridge, Massachusetts (1981), p.32 を参照されたい。

⁷ この種のワッセルマンの批判は、物理主義とセットの HS だけでなく、HS が任意の「〇〇主義」とセットになる限りにおいて有効なものといえる。しかしそもそものヒュームの意図を考慮する限りでは、HS は局所的環境における内在的性質を科学的に論じるためのものであって、そもそものが世界様相を外在的に説明するためのものではなかった点には注意する必要がある。

⁸ 「実際は、私が是認していることは、ヒューム主義的スーパーヴィーニエンスの真理性ではなく、その弁護可能性 (tenability) である。」(*Philosophical Papers* vol.II, intro p.xi).

⁹ David Hume, *A Treatise of Human Nature*, eds. L.A. Selby-Bigge and P.H. Nidditch, Oxford (1978), p.234 (『人間本性論』第一篇・第四部・第五節「魂の非物質性について」の議論) を参照されたい。以下、同書からの引用は、略号 T・ページ数、または篇・部・章の順に表示する。

と私は結論づけているからだ¹⁰というルイスの話し方には、明らかに、非物理主義的な法則性や性質を許容する態度が含まれている¹¹。

こうしたことを考慮するならば、HS と物理主義との本質的な違いは以下のように説明できるであろう。HS が局所化された性質を認め、それを重視するのに対し、物理主義は外在的な観点から前提とされる物理的法則性のもと、各種性質を整合的に説明するような理論体系を重視することにある、と¹²。つまりは、ルイス自身が内在的性質を認めていることから、ワッセルマンの批判がルイスの議論すべてに対し壊滅的な打撃を与えるわけではなく、HS の意義はなおも生き残れるように思われる。ただし、ルイスの場合、内在的性質をHS 的に組み込んださまざまな世界様相がモデルとして実在した上で、「現実に近い世界モデルとして有効な説明体系を組み込んだ物理主義的世界観が採用されるべき」と強調する点で実質上は外在主義的な物理主義であるし、このことはルイスの反事実条件分析にも示されている。しかし、たとえルイスの議論に説得力が残されるにしても、ルイスのそうしたプラグマティックな「ヒューム主義」と、我々の「常識的直観」が訴える内在的因果性概念とのミスマッチは、「われわれの常識」を整合的な信念をもって説明するよう期待される「ヒューム主義」にとって、なおも重大な問題が残されているようにも見える。

3. ヒューム主義が抱える問題はどのように「解消」されるのか？

もちろん、ルイスの理論に対し「ヒューム本来の主

¹⁰ *Ibid.*, intro p.x, また, “New Work for a Theory of Universals.” in *Australasian Journal of Philosophy* 61 (1983), pp.343–77 などでも、非物理的法則性の許容可能性は主張されている。

¹¹ 「この世界とまったく同一の現象が別の世界で観察される場合でも、そこでは物理主義以外の法則性が機能しうるのはあるが、少なくともこの世界では物理主義的な説明体系を採用の方がよい」とルイスは考えているようでもあり、その点では「付随性についての弱い主張」のようにも見える。

¹² G・ブレイヤーとF・シーベルトも、HS の内在的局所性と物理主義的外在性との区別を重要視している。Gerhard Preyer and Frank Siebelt, “Reality and Humean Supervenience: Some Reflections on David Lewis’s Philosophy.” in *Reality and Humean Supervenience: Essays on the philosophy of David Lewis*, eds by Gerhard Preyer and Frank Siebelt, Rowman & Littlefield Publishing, Inc. (2001), pp.2–3.

観主義的論調を逸脱しているために「ヒューム主義」などではない」と言うことによってこの問題を避けるやり方もあるだろう。こうしたやり方を採用し、それでもなおヒュームを単なる懐疑論的な主観主義者としないうという戦略をとるものとしては、B・ワードの「HS なしのヒューム主義」というものがある¹³。それは、世界様相的な法則性を主張するようなHS を排除する一方、「我々は投影論的な形で自然に、説明体系としての法則性言明を使用している」という見解を採る。この戦略では、世界様相的な法則実在性に頼らずとも、自然主義的な仕方では理解可能な関係を「常識的に」利用しているということになる。

ただし、私が思うに、こうした戦略は物足りない感がある。たしかに、物理主義とHS とは必ずしも結び付けられるべきものであるわけではないし、この意味で、物理主義をHS と結びつけた形で主張するルイスはヒューム主義を拡張しすぎているといえるかもしれない。そしてワードが指摘するように、「物理主義などにおける法則性言明は、投影論の観点のもとで本来の有用性を備えているのである」といえなくもないであろう。しかし、だからといってヒューム主義からHS を抜きとり、「投影論」としてその重要性だけを強調するその仕方は、根幹部分の存在論的主張を軽視するような、あまりにも薄っぺらい印象があるし、それはそもそも「ヒューム主義」と呼ぶに相応しいものであるようには思われない（投影論に限るならば、わざわざ「ヒューム主義」という必要もないように私には思われる）。もちろん、まったく認識論にコミットすることなくHS の存在論だけを強調すれば、それは本来ヒュームが批判した理性主義に近いものとなり、ヒューム主義としてみずにはまったく相応しいものではなくなるのではあるが。

私が考えるところでは、ルイス風の modal realism や物理主義もろともHS を葬り去ったり、HS を排除した形で投影論的ヒューム解釈に沿ってのみ法則性言明を擁護する必要などはない。というのも、次節以降で述べるように、そもそもHS の世界観を取り去ることによってはヒュームの批判的認識論は土台を失ってしまうからである。しかし、だからといってルイスが行うように、暗に合理性を鏝とすることによって、主

¹³ Barry Ward, “Humeanism without Humean supervenience: A Project Account of Laws and Possibilities.” in *Philosophical Studies* 2002, volume107, No.3, pp.191–218.

観的な確信を物理主義的な法則性言明へと直接的に接合する必要もない。HS 批判も HS 擁護も、その多くは「ヒュームの認識論は、その存在論と完全にマッチしなければならない」という思い込みから成り立つものであり、そこから「HS を捨てるか、主観的信念を普遍化すべきか」という二者択一的な選択肢をヒューム主義に対して迫っているようであるが、そもそもそうした思い込み自体が間違っているように思われる。

私が強調したいポイントは、そもそもヒューム自身の存在論と認識論とは根本的に異なるレベルのものであるという点である。いわば、ヒュームの議論は二段構造となっていて、基礎となっている HS 的存在論（私はヒュームのそれを「自然的世界観」と解釈している）の上に、建物として具体的な実在論的立場への批判とその根拠としての認識論とが設置されている、といえる。しかし、上段部分のみがあまりにもヒューム思想として注目されているために、一般的なヒューム解釈においては「反実在論的」であるかのようにみなされがちであるのが現状であろう。それゆえ、「ヒューム主義」というものが、HS によってタイプ化される世界様相を重視する実在論か、あるいは、懐疑的態度を多分に含んだ認識論によって遡及される反実在論のいずれかの選択を迫られる場合、どうしても後者の方がヒュームの認識論の部分を多分に含んでいるだけに説得力があるように見えてしまう。こうした解釈的傾向に対し、本論考の問題意識としては、ヒュームの存在論と認識論とはそれぞれ異なるレベルのものであり、それぞれは、互いを補うような「科学的態度」に組み込まれうることを示すことにある。そのためには、ヒュームのテキストを注意深く振り返る必要があるだろう。

4. 「無限分割不可能性」からのヒュームの存在論

まず、ヒュームの存在論について明らかにしておきたい。ヒュームは存在論にあまりコミットしておらず、それゆえ認識論的な立場から因果性や同一性を批判的に論じた懐疑論者あるいは反実在論者の印象が非常に強いのであるが、実はそのような批判的認識論の基礎にはヒューム自身が依拠する存在論的立場が基礎となっている。それは無限分割可能性を否定するヒュームの議論である。「無限分割不可能性」については、『人間本性論』第二部「空間および時間の観念について」の第一節・第二節で議論されている。まず、最初のポイントは二つで挙げることができるであろう。

- (1) 「無限に分割できるものは無限数から成るのであるが、有限の全体が無限の部分から構成されているというのは我々の直観に反する」ので、存在の最小単位（最小体：minimum）を認めねばならないこと。
 - (2) 「対象として示されるものは精神であれ肉眼であれ表象によって示されている」ので、表象としての縮小サイズには知覚的限界があることから、もはやそれ以上分割できない知覚単位が存在すること。
- 以上のことをまとめるならば、(1) において、存在の最小単位概念を我々は認めざるをえず、それが (2) のように現象として我々の知覚に示されるということである。例としては、「紙についたインクの染みが、遠ざかるにつれて見えなくなる瞬間、それが分割不可能な知覚である」というものが挙げられている (T28)。もっとも、このケースは無限分割が実際になされているわけではなく、主観的な知覚極小点を意味しているにすぎないようにも見えるが、これはなんにも、主観的な形でのみ最小点が理解できる、という意味ではない。むしろ、認識対象と対象との有限的距離において、そこには極小的空間の連続性「延長」が存在し、そこに内在する「認知されうる性質」の存在可能性をこのことは意味しているのである。そして、これが最小体たる存在論的「粒子」を意味していることは、三つ目のポイントとしてのヒュームの第一性質と第二性質の区別を見ることによって明らかになってくる。それは
- (3) 「色」などの第二性質をもった最小点が実在し集合しているからこそ、第一性質たる「延長」を、第二性質を必然的に有した「対象」として我々は知覚できる。

というものである。つまり、直接知覚はできないが「色」性質をもった実在的最小体が実在しているからこそ、我々は「延長」を「対象」として知覚できる。逆に、「色」性質などの第二性質をもっていない対象は、決して「延長」として我々が知覚できないがゆえに、それは想像上存在しうることはあっても、現実的に実在するとはいえない。T1・4・4「当代の哲学について」では、第一性質（延長、固体性）と第二性質（色、音、味、香）の区別において、後者が単なる主体にのみ依存する知覚にすぎないならば、もはや前者の実在性も否定される、とヒュームは主張する (T227)。その理由としては、第一性質として知覚される「延長」そのものが、何

らかの色や手触りといった、我々に感じ取られる第二性質をもっていなければ知られることはないからである。もちろん、健康状態や、手足の麻痺などの身体的変化により、第二性質は変化して知覚されるため、外的対象の第一性質が同じであるにも関わらず、第二性質が変化するという事態をヒュームは認めている。しかし、ヒュームにおいて、「第二性質を欠落した第一性質というものは存在しない（存在すると語ることに意味はない）」としていたことは注目に値する。というのも、こうしたヒュームの議論は、本質的な実在概念たる粒子（最小体）は、必ずわれわれに知覚される性質をもつことを含意しているからである。

こうしたヒュームの議論における重要なポイントは、これ以上分割できない最小体は、「延長」として把握される限りにおいて、主体に対し「延長」以外の性質を可能的に引き起こす形で世界内部に実在しているということにある。このことを理解するには、ヒュームの「数学的点」に関する考え方も振り返るべきであろう¹⁴。ヒュームは、T1・2・4で「数学的点には色または固体性を認めるべきである（T40）」と主張しているが、この場合の「固体性と」は不可入性を伴うものであって、ロックと同じ粒子説を採っているようにも見える。ただし、ロックは粒子に対して延長を認める立場であるが、ヒュームは粒子＝数学的点として、それが延長であることを認めない立場である。ヒュームにとって、数学的点は非延長でありながら色を有することになるが、そうした数学的点は実際に感覚の対象となるためには、延長とならざるを得ない。粒子＝数学的点が「存在者」として我々に関わっていると言うためには、「それ自身は延長ではないが、延長となつてはじめて本来の性質を我々に知らせるところの性質をもつ」という位置付けが必要である¹⁵。これは「最

小体それ自身は、感覚的对象として現れざるを得ない性質をもっている」と言い換えることができ、ここから、ヒュームの現象論的な議論の背景には、実在論的な存在概念（粒子概念）があるといえる¹⁶。ここから、HSが依拠する世界観が実在論的なものであることが確認できるであろう。

5. 実在概念を疑う認識論へ

以上のように、ヒュームの「無限分割不可能性」の議論は、最小点たるべき粒子の実在性を認め、それが知覚主体である我々とともに世界に組み込まれていることを示すものである。しかし議論が因果批判や同一性批判に進むやいなや、「無限分割不可能性」の議論から持ち出されたHS的原理は「知覚個別化原理」として認識論的議論に適用され、懐疑主義的な装いを帯びてくる。

「無限分割不可能性」の議論から最小体が導出され、そこから空間およびそこに位置する「対象」とは最小体の集合（すなわち「延長」）ということが帰結される。そして、この議論はさらに時間概念にも適用されることによって、「時間」は最小時間点の集合（時間軸上の「延長」）ということが帰結される。そして「時間概念」の分析が、「時間概念を背景とする対象知覚」の分析に移るとき、つまり、「持続時間が最小時間点の集合である」という議論から、「持続時間を背景とする持続知覚は知覚最小時間点の集合である」という議論に移るとき、世界実在的な「延長」は知覚最小時間点の集合（時間軸上の「知覚の延長」）ということになる。つまり、時空に関する直観形式の問題が、時空に関する認識者の知覚形式の問題にすり替わっているのである。（ここにおいて、議論はすでに存在論から認識論へと移っている）。

れている（その「色」についての完全に正確な認識が可能であるかどうかは別問題としても）。また、ルイス自身それを意識したうえで、「時空的ポイントそれ自体は粒子の集合であり、そこにおいて局所的性質が存在する」と述べている（*Philosophical Papers* vol.II, intro p.x）。

¹⁶ これは本論考全体に通じる非常に重要なポイントである。或る事物を実在的なものとして語るという営みの根底には二つの条件があり、一つは、その事物が世界内部において第二性質を有すること、そしてもう一つは、その第二性質を感じ取れる感覚主体が世界内部に同時に存在していること、ということである。これはヒュームの世界観を如実に示しているようにも思われる。

¹⁴ 数学的点はそれ以上分割できない点であり、延長ではなく、微小であるがゆえに単位観念ではあるものの、それ自体で計測可能な量の単位ではない。ゆえに、数学的点は点としてそのまま知覚されるわけではない。しかし、こうした数学的点について、全体の印象は部分から構成されていることからその存在は明瞭であるとヒュームは語るが、これは粒子概念そのものを表しているといえるであろう。T1・2・4の数学的点（mathematical points）の議論を参照されたい。

¹⁵ 「人間本性論」第二部「空間および時間の観念について」の第1,2節を参照されたい。ヒュームが認める最小体（粒子、あるいは数学的点）が観察可能な実体として認められる場合には、それは「集合体としての延長」という形態をとっており、そこで認識される性質（色）は本来粒子が有していた性質の顕現として理解さ

さて、因果的・同一的な「現象」「物体」の概念がここでの「持続」を可能とするべき「延長」という性質を備えていなければならないということは、逆にいえば、「延長」でないものは、因果的・同一的な「現象」「物体」としては認識しえないことになる。ここで注意したいのが、因果的・同一的な「現象」「対象」が知覚可能な形で「延長」性質をもっているということが、「時空概念の分析」が「時空概念を背景とした対象知覚の分析」へと移るまさにそれを契機として、世界そのものから主体-客体関係のもとでの認識論的な延長概念に変形した、という点である。

こうして、「延長」を獲得した知覚認識は、言語化のもとでの説明対象となる。そのように、「延長」が世界断片的な形で認識上カテゴライズされないことには、「因果性」の概念を理解することはできないし、「原因」「結果」という言葉の意味すらも理解できないであろう。言語によって表現されるものは世界から差異化され、それは認識において各種操作の対象となる。私がここで強調したいのは、因果性などを語る場合においては、主体が自らの選好や信念を世界に投影しているのではなく、世界から剥ぎとられた形の対象認識が言語化されながら操作対象となっている、という点である。「引き剥がす」という意味ではそれは単なる「観察」ではなく「認識の行為」であり、それは言語的な指示機能を駆使しつつ、世界と対象との差異化を果たすことによって「因果的理解」を可能としている。つまり、ヒュームの因果批判・同一性批判が暗に示しているのは「言語上理解されうるものとしての「延長」が直観的な世界観と本質的にズレていなければ、そもそも因果性や同一性を「知識」として理解したり共有することはできない」ということである。ポイントを明確にするためにあえて別の言い方をすれば、ヒュームが重視する「類似」「近接」「恒常的接続」というのは、因果性・同一性概念について蓋然性を含みながらもそれを理解するカテゴリーとして有効であるのだが、その背景には、HSの基礎ともいえる時空的實在性が非言語的な形で広がっている、といえよう¹⁷。

¹⁷ これは、存在論的レベルのものについては主体の知覚とは独立的に連続する一方、認識レベルにおいては或る現象や対象へ言及する場合には誤りうるような、しかし本質的な直観形式が必要であるということである。その上で、カテゴライズされた「単位としての時空的知覚延長」が断片的になればなるほど、認識における存在論的リアリティが減っていき、知覚-経験主義的傾向が強まってゆく。この点で、ヒュームが實在論的立

6. 「ヒューム主義的な不調和」を内在する科学的態度

通常のヒューム解釈においては、知覚-経験重視の認識論の方が重視されてきたし、そうしたヒューム主義は、「認識上うまくいくように因果性・同一性が構成されるならばそれで事足りる」といったプラグマティズムと結び付いてきた。この点で考える限りでは、ヒューム主義は「表出論」や「投影論」であるといってもあながち間違いではないだろう。一方、そうした認識論が本来依拠するところのヒュームの存在論的世界観を重視し、それが世界様相を示すものとして認識論と整合的であるよう理論構築をするならば(ルイスのように)、HSによって示される世界様相を重視した實在論も間違いとはいえない。しかし私が繰り返し強調したのは、前者のようにヒュームの存在論をまったく無視する必要もなければ、後者のようにヒュームの存在論と認識論を一对一の形で整合させる必要もないということである。

HSは世界の多様性を實在論的な形で提示しながら、或る特定の世界における科学的態度の基礎となっているものである。しかし、この世界がどのような世界であるかを理解できるかどうかは認識論の問題であり、そこでは「類似」「近接」「恒常的接続」を用いた理解の仕方が必要である。物理主義はそのような理解の中でも最も有力なものかもしれないが、しかしそうであっても世界の在り方について我々が為し得る理解は、必然的に断片的であり可謬的なものとならざるをえない。けれども、ヒュームの認識論の背景となっている世界観は、實在的かつ認知主義的な役割を果たす第二性質を顕わにする「延長」と、それ認知することができる

場をとっているにしても、それはプラトン主義というよりはむしろカント主義に近いであろう。

これとの関連で、本論考以外にもカント主義に近いものとしてヒューム解釈をしているものに触れておこう。L・W・ベックは、ヒュームの“propensity”とカントの“category”との類似性に着目する。ベックが強調するのは、ヒュームの因果性批判の根底には「すべての出来事には、先行する結果がある」という先験的観念が暗黙のうちに用いられながら、それがカントにおいて理論的に完成した形で明示化されたという点であり、この意味で、ヒュームとカントは一連の共同作業をしていたという解釈可能性が提示されている。L. White Beck “A Prussian Hume and a Scottish Kant.” in *DAVID HUME, Critical Assessments*, vol. VI, ed by Stanley Tweyman, Routledge (1995), pp. 265–279.

認識主体を組み込んだ実在論的世界観である。認知の仕方の是非や、認知によって構成された理論がそれぞれ異なっている点では懐疑主義者や相対主義者に一步譲らなければならないにしても、世界の在り方は我々に対し認知可能な性質を備えており、ヒューム主義が「合理性」と結び付く形で科学理論となるためには、まさにこの認知主義的世界形態が物理主義をも可能に含む形で保持されていなければならない。つまり〇〇主義としてのHSの合理性は、言語化される形で様相上の比較のもとに明示されるにしても、その正当化理由は、認識者としての我々が実在的性質をいかなる形であれ適正に認知していることを条件としていると私は考える。HSによる法則性言明の理論化は、語れないものを語ろうとする営みかもしれないが、その「語る」という行為には少なからず正当化理由をもった「自然における認知」が含まれている、というのが私の見解である。ただし、重要なことは、その正当化を一方の議論からのみで済ませるような独断的〇〇主義に留まることなく、多様性を駆使しながら内在的性質に関する理解を高めてゆく営みが必要であるということである。

このことは、「独断主義」と「懐疑主義」の狭間にこそ健全な人間の在り方がある、と考えたヒュームの穏健主義とも関連しており¹⁸、そもそもこうした穏健主義こそが、我々の本来あるべき日常を示すと同時に、その「日常」こそが、「われわれ」を科学的コミュニケーションへと誘うための舗装を準備するための条件と私は考える。「独断主義」であれば、HSが示す特定の存在論的主張をそのまま採用しながら「疑い」を持ち得ないため、そうした世界の見方を一変させるような別の世界観について検討する姿勢などが生じることはない。一方、「懐疑主義」のように、徹底的にあらゆる理論の正当性を疑うことはできても、そうした「懐疑」はコミュニケーションにおいて客観性に寄与するものではなく、何が正当であるのかを保証すべき土台を確定できないまま、合理的判断そのものを見失わせてしまう。存在論と認識論が不一致でありながらもなお、実

在把握の可能性と多様性とを含みながら共存してゆくことによって、認識する行為者としての「われわれ」が「何を見ているか」についての答えが多角的に次第に顕わになってゆく。ヒューム主義が抱える「存在論」と「認識論」との互いの不一致という大きな問題は、HS的世界観における内在的性質の「語られにくさ」の問題でもあるのだが、しかしそれが解消されないままであってもなお、HS的世界観は我々の科学的態度の成立を自然に支えているようにも思われる¹⁹。

参考文献

- [1] Beck L. White "A Prussian Hume and a Scottish Kant" in *DAVID HUME, Critical Assessments*, vol. VI, ed by Stanley Tweyman, Routledge (1995), pp.265-279
- [2] Hume. David *A Treatise of Human Nature (1739-40)*, Second Edition by P.H. Nidditch, Oxford U.P (1978) — デイヴィッド・ヒューム『人間本性論第一巻—知性について』木曾好能訳、法政大学出版局 (1995)、デイヴィッド・ヒューム『人間本性論』全4巻、大概春彦訳、岩波文庫 (1948-51)
- [3] Lewis, David. *Philosophical papers volume II*, Oxford (1986)
- [4] Lewis, David. "Humean Supervenience Debugged," *Mind*, Vol.103.412 (1994) Oxford U.P
- [5] Lewis, David. "New Work for a Theory of Universals," *Australasian Journal of Philosophy* 61 (1983) — デイヴィッド・ルイス「普遍者の理論のための新しい仕事」柏端達也、青山拓夫、谷川卓(編訳)『現代形而上学論文集』勁草書房 (2006)
- [6] Lewis, David. "Survival and Identity," in *The Identities of Persons*, University of California Press Berkeley and Angeles, California (1976)
- [7] Nozick, Robert. *Philosophical Explanations*, The Belknap Press of Harvard University Press Cambridge, Massachusetts (1981) — ノージック・ロバート『考えることを考える(上・下)』坂本百大ほか訳、青土社 (1997)
- [8] Preyer, Gerhard and Siebelt, Frank (ed). *Reality*

¹⁸ 『人間本性論』第一巻「知性について」の最後の方では、ヒューム自身は自らを懐疑主義者とみなしているが、しかし、そこに長く留まることは難しく、たびたび現実的思考に呼び戻される、と告白している。健全な懐疑的態度は真なる哲学者の態度であり、それを「穏健な懐疑主義 (moderate scepticism: T224)」とヒュームは呼ぶが、それは「信仰」と「懐疑」との狭間にあるものである。

¹⁹ 存在論と認識論の不一致の共存と、そこで発生する「批判的思考」の問題については、「すでに或程度のルール概念を共有・使用してこそ、ルール違反可能性が、ルールと同様、有意味なものとして理解できる」というような「コンベンション・ルールの可変的実在性」とも関係しているように思われる。この点については別の機会で論じてみたい。

and Humean Supervenience, Essays on the Philosophy of David Lewis, Rowman & Littlefield Publishers, Inc

- [9] Ward, Barry. "Humeanism without Humean supervenience: A Project Account of Laws and Pos-

sibilities," in *Philosophical Studies* 2002, volume 107, No.3

- [10] Wasserman, Ryan. "Humean Supervenience and Personal Identity," in *The Philosophical Quarterly* Vol.55 No.221, Blackwell (2005)